简明日语语法学

孟 瑾 編

吉林大学出版社

图书在版编目（CIP）数据

简明日语语法学 / 孟瑾编.—长春：吉林大学出版社，2003.3

ISBN 7-5601-2803-3

Ⅰ.简…Ⅱ.孟…Ⅲ.日语—语法
Ⅳ.H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2003）第 014123 号

简明日语语法学

孟　瑾　编

责任编辑：史东阳　　**封面设计：**李立嗣

吉林大学出版社出版　　吉林大学出版社发行
（长春市明德路3号）　　四平亿顺印刷有限公司
开本：850×1168毫米　1/32　　2003年2月第1版
印张：14.375　字数：359千字　　2003年2月第1次印刷

ISBN 7-5601-2803-3/H·318　　定价：26.00 元

前 言

语法学（日文称「文法学」）是研究语法规则及体系的学问。语法论（日文称「文法论」）是关于语法体系的论述。两者着眼点不同但研究的内容接近。本书旨在介绍日语语法规则及基本理论，故使用了语法学的概念，以《簡明日语语法学》为题，奉献于读者。

日本在明治维新以前，语法研究主要是解释日本的古典文献。这一时期的语法研究受汉语法即中国语学的影响颇深，所研究的内容局限在假名的使用、助词以及词的分类方面。明治维新以后，西方语言学传入日本，促进了日本语法学的研究。代表人物有鹤峰戊申、大槻文彦，开创了日本的语法学体系。明治中期，日本现代口语从文言中分离出来，日本的语法学分成了旨在解读古典文献为目的的文言语法（亦称为解释文法）和以现代口语为主的现代语法两大体系。到了昭和中期，以山田孝雄、时枝诚记、桥本近吉为代表的现代语法有了很大的发展，形成了日本语法史上著名的“三大语法”。特别是以“实用”为宗旨、以桥本近吉语法学说为基础的规范语法——“学校语法”问世以来，语法体系逐步从理论语法向功能语法发展，并日趋完善。但是到了现代，西方语言学理论的飞速发展，动摇了日本传统的“三大语法”的根基，日本的“学校文法”越来越显露出不合理的部分，越来越受到日本语言学界的广泛批判。渡边实、三尾砂、铃木重幸、三上章、铃木康之等诸多语言学家提出了各自的语言学理论或语法体系，特别是现代的生成语法理论、语言形态论、西方语义学、语用学等不少现代语言学理论已经融入

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

到现代日语语法体系中，促进了日语语法及体系的更深刻、更广泛的研究。

本书首先通过介绍“副用语”、“语基”等日语中有争议的语法概念了解语法学中语言的最小单位——单词的定义，作为语法学入门。通过介绍桥本语法、山田语法、时枝语法（“三大语法”）的基本内容、显现各家语法的不完善之处。通过介绍日本“学校语法”及“学校语法批判”、现代各家语法学说对品词分类的观点和现代教育语法中新的品词分类，阐明日本语法学中有争议的问题和解决办法，从而全面了解现代日本教育语法对传统语法作了哪些改革。通过介绍诸多现代语法学家对“日语的语序”、“主语和主题的界定”、“指代关系”、“疑问和否定”、“时态和体”、“日语从句的基本特征”、“日语的敬语体系”等的论述，了解现代西方先进的语言学理论是如何解读现代日语语言现象的，这对了解日语的基本特征，深入研究日语语法和学习日语语法学是非常有益的。

本书是在研究生日语语法学（学位课）的教学过程中，回答学生的提问而查阅资料的基础上日积月累编写而成，虽然还不够系统，但可以作为学习、研究日语语法学时参考使用。由于本人日语语法理论功底浅薄，错误或疏漏在所难免，不妥当之处，敬请读者及同行批评指正。

在编写本书的过程中，吉林东北师范大学洪栖川教授给予了热忱的指导，在此表示由衷地感谢！

孟 瑾

2003 年 2 月 14 日

目　次

第１章 …… 1
　1　文法 …… 1
　2、文法論 …… 4
第２章　明治期の文法論 …… 6
第３章　文法の単位 …… 9
　一　語の次元 …… 9
　二、副用語と体言・用言 …… 13
　三、副用語と他の品詞との関係 …… 15
　四、成分の核となる語基 …… 17
　五、語基の位置にある体言・用言 …… 19
　六、単語という単位 …… 25
第４章　伝統的３大文法 …… 29
　一、橋本文法 …… 30
　　1、橋本文法は形態重視の文法論である…… 30
　　1-1 文 …… 30
　　1-2 文節 …… 31
　　1-3 格（単語） …… 32
　　1-4 品詞の分類 …… 34
　　1-5 連文節 …… 36
　二、山田文法 …… 38
　　1、日本語から出発した文法理論 …… 38
　　2、統覚作用、陳述２、統覚作用、陳述 …… 38
　　3、語の分類、用言の本質 …… 41

4、まとめ …… 48
5、陳述論への道 …… 49
6　喚体・述体の意義 …… 52
三、時枝文法 …… 55
1、時枝文法の理論体系 …… 55
2、時枝文法の「文論」 …… 56
3、詞と辞との意味的関係 …… 57
4、句と入子型構造 …… 58
5、用言に於ける陳述の表現 …… 61
6、文の成分と格 …… 62
7、結論 …… 68
第5章　学校文法について …… 69
一　学校文法とは …… 69
二、橋本学説と学校文法 …… 72
1、橋本学説と学校文法の構成 …… 72
2、橋本学説が学校文法の主流となった原因 … 74
3、矛盾に陥った橋本進吉 …… 74
三、学校文法批判 …… 77
1、概説 …… 77
2、助動詞を認めない
山田孝雄と氏の「複語尾説」 …… 77
3、五段活用表づくりの不統一と非科学性 …… 80
4、語幹・語尾の区別基準にある疑点 …… 82
5、活用形の名称への配慮の不十分さ …… 82
6、鈴木重幸と形態論 …… 83
7、渡辺実と三上章の場合 …… 87
第6章　佐久間鼎と三尾砂の文法 …… 88

一、佐久間鼎の文法の特色 …… 88
1、コソアド …… 89
2、動詞の活用 …… 91
3、自動詞と他動詞の対応 …… 93
4、アスペクト …… 94
5、まとめ …… 95
二、三尾砂の文法観 …… 96
1 概論 …… 97
1-1 文脈と場、そして文の分類について …… 98
1-2 文型について …… 101
第7章 品詞 …… 103
一 現代の日本語教育文法 …… 104
1 語の構造 …… 104
2 活用語 …… 105
3、派生語 …… 105
4、複合語 …… 106
二、新しい品詞分類 …… 107
1 動詞 …… 107
1-1 動詞の分類 …… 107
1-2 動態動詞と状態動詞 …… 108
1-3 自動詞と他動詞 …… 109
1-4 意志動詞と無意志動詞 …… 110
1-5 活用 …… 111
1-6 複合動詞 …… 120
1-7 借用動詞 …… 123
2、形容詞 …… 124
2-1 基本的性格 …… 124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2-2 属性形容詞と感情形容詞 …… 124
2-3 イ形容詞とナ形容詞 …… 125
2-4 活用 …… 126
3、判定詞 …… 128
3-1 基本的性格 …… 128
3-2 活用 …… 128
3-3 判定詞の基本形が
現れることができない場合 …… 130
3-4 名詞述語の機能 …… 131
4、助動詞 …… 132
4-1 基本的性格 …… 132
4-2 助動詞一覧 …… 133
4-3 活用 …… 134
5、名詞 …… 135
5-1 基本的性格 …… 135
5-2 名詞の意味範疇 …… 135
5-3 数量名詞 …… 137
5-4 形式名詞 …… 138
6、指示詞 …… 140
6-1 基本的性格 …… 140
6-2 指示詞の形態 …… 140
6-3 疑問語・不定語 …… 141
7、副詞 …… 143
7-1 基本的性格 …… 143
7-2 様態の副詞 …… 143
7-3 程度の副詞 …… 144
7-4 量の副詞 …… 145

7-5 テンス・アスペクトの副詞 …… 147
7-6 陳述の副詞 …… 148
7-7 評価の副詞 …… 149
7-8 発言の副詞 …… 150
7-9 その他の副詞 …… 150
8、助詞 …… 150
8-1 基本的性格 …… 150
8-2 格助詞 …… 151
8-3 提題助詞 …… 151
8-4 取り立て助詞 …… 152
8-5 接続助詞 …… 152
8-6 終助詞 …… 154
9、連体詞 …… 156
9-1 基本的性格 …… 156
9-2 由来と分類 …… 156
10、接続詞 …… 157
10-1 基本的性格…… 157
10-2 接続詞の由来…… 157
10-3 接続詞相当句…… 158
10-4 接続詞相当句の丁寧形…… 158
11、感動詞 …… 159
11-1 基本的性格…… 159
11-2 感動詞の分類…… 159
12、接辞 …… 160
12-1 基本的性格…… 160
12-2 接頭辞…… 161
12-3 名詞性接尾辞…… 161

12-4 形容詞性接尾辞…… 163
12-5 動詞性接尾辞…… 164
12-6 特殊な接辞…… 165
13、補説 …… 167
13-1 活用について…… 167
13-2 派生について…… 168
13-3 形態素と異形態…… 168
13-4 語の分類について…… 169
13-5 同音異語と多義語…… 170
第８章　日本語の語順 …… 171
１、語順とは …… 171
２、「述語」と「補語」と助詞 …… 179
第９章　主語と主題 …… 183
１、三上章の主語廃止論 …… 185
２、「は」と「が」をめぐる諸問題について…… 191
2-1 始めに …… 191
2-2 「は」と「が」の使い分けの原理 …… 192
３、象は鼻が長い …… 195
3-1 概論 …… 195
3-2 ぼくはウナギだ …… 196
４、提題と取り立て …… 198
５、提題助詞「は」と格助詞 …… 200
６、総主の構文 …… 201
７、有題文と無題文 …… 202
８、「は」以外の提題助詞…… 204
９、取り立ての基本的性格 …… 205
10、取り立て助詞の文中での位置 …… 206

11、取り立て助詞の主な用法 …… 208
12、取り立て助詞と数の表現 …… 211
第10章 指示について …… 213
一、指示 …… 213
1、特定指示、不特定指示、総称指示 …… 213
2、「コ・ソ・ア」を含む
名詞的語句の指示の仕方 …… 216
3、直接状況性の特定指示と
間接状況性の特定指示 …… 219
4、まとめ …… 220
二、ダイクシス …… 221
1、ダイクシスの定義 …… 221
2、ダイクシスの種類 …… 225
3、ダイクシスのA類とB類 …… 226
四、照応 …… 229
1、照応とはなにか …… 229
2、照応のⅠ類とⅡ類 …… 234
3、前方照応と後方照応 …… 236
4、「コ・ソ・ア」のダイクシス用法と
照応用法 …… 241
5 まとめ …… 248
五、限定 …… 249
六、場面と場 …… 255
七、「コ・ソ・ア」の体系 …… 258
1 「コ・ソ・ア」の用法 …… 259
2、現場指示の用法 …… 259
3、文脈指示の用法 …… 269

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3-1 融合型と対立型 …… 269
3-2 「ア」の用法 …… 278
3-3 「ア」と「ソ」 …… 280
3-4 「コ」の用法 …… 286
3-5 「ソ」の用法 …… 302
3-6 後行叙述内容の指示 …… 305
4、知覚対象指示の用法 …… 308
5、観念対象指示の用法 …… 309
6、限定指示と代行指示 …… 312
7、絶対指示 …… 315
第11章 疑問と否定の表現…… 317
一 疑問について …… 317
1、疑問表現の基本的性格 …… 317
2、分類 …… 317
3、疑問の形式 …… 319
4、「だろう」と疑問表現…… 320
5、疑問文の意味と答え方 …… 321
6、疑問の焦点 …… 323
7、否定表現の基本的性格 …… 323
8、態の否定と判断の否定 …… 324
9、否定と呼応 …… 325
10、全部否定と部分否定 …… 326
第12章 テンスとアスペクト…… 328
1、テンスの基本的性格 …… 328
2、基本形とタ形 …… 328
3、動態述語のテンス …… 329
4、タ形のムードを表す用法 …… 331

5、アスペクト …… 332
5-1 アスペクトの基本的性格 …… 332
5-2 アスペクトを表す諸形式 …… 332
5-3 テイル形の用法 …… 335
第 13 章 復文に関する諸問題…… 338
1、補足節 …… 338
1-1 基本的性格 …… 338
1-2 形式名詞「こと」、「の」、「ところ」 …… 339
1-3 疑問表現の補足節 …… 341
1-4 引用節 …… 342
2、副詞節 …… 344
2-1 基本的性格 …… 324
2-2 副詞節の形式と分類 …… 344
2-3 時を表す副詞節 …… 345
2-4 原因・理由を表す副詞節 …… 347
2-5 条件・譲歩を表す副詞節 …… 349
2-6 付帯状況・様態を表す副詞節 …… 351
2-7 逆接を表す副詞節 …… 353
2-8 目的を表す副詞節 …… 354
2-9 程度を表す副詞節 …… 355
2-10 その他の副詞節…… 355
3、連体節 …… 357
3-1 基本的性格 …… 357
3-2 補足語修飾節 …… 357
3-3 相対名詞修飾節 …… 359
3-4 内容節 …… 360
4、並列節 …… 362

4-1 基本的性格 …… 362
4-2 順接的並列と逆接的並列 …… 363
4-3 順接的並列の種類 …… 363
4-4 連用形並列とテ形並列 …… 365
4-5 否定のテ形による並列の表現 …… 365
5、従属節の従属度 …… 367
5-1 従属節に現れ得る表現 …… 367
5-2 従属節における提題表現と丁寧表現 …… 368
5-3 従属節のテンス …… 369
第14章　敬語について …… 371
1、敬語の体系 …… 371
2、ことばの男女差 …… 381
1-1 基本的性格 …… 381
1-2 男女差の事例 …… 381
1-3 文体と男女差 …… 384
3、社会言語学における敬語 …… 385
付加研究資料 …… 387
一　言語、文について …… 387
1、言語・文法について …… 387
2、言語単位について …… 388
3、文について …… 391
4、文の成分について …… 392
5、文の構造について …… 394
6、文の種類について …… 396
二、品詞分類について …… 398
1　詞と辞 …… 398
2、体言 …… 399

3　名詞 …… 401
4、数詞 …… 402
5　代名詞 …… 403
6、副詞 …… 405
7　連体詞 …… 408
8、接続詞 …… 409
9、感動詞 …… 411
10、用言 …… 413
11、動詞 …… 414
12、形容詞 …… 417
13、形容動詞 …… 419
14、助動詞 …… 421
15、助詞 …… 425
三、教育事典による品詞分類 …… 429
1　名詞 …… 429
2、代名詞 …… 430
3　動詞・形容詞・形容動詞 …… 431
4、副詞 …… 433
5、連体詞 …… 434
6　接続詞 …… 435
7、感動詞 …… 435
8　助動詞 …… 436
9、助詞 …… 439
主な参考文献 …… 441

第１章

文法と文法論

１　文法

文法は「ことばのきまり」と言い換えられることがある。広くとれば、どのような場面でどのようなことばを使うかもきまりであるが、それは表現の選択に関する文体論の問題で、文法は、時間の流れに沿った一つづきの言語表現がどのように組み立てられるかについての類型に関するきまりである。

記述の目的の違いによって、学校文法、表現文法、記述文法、解釈文法など、対象の違いによって、口語文法、文語文法などに分け、言語間の文法比較を行うものを対照文法という。標準教育を志向する規範文法は、時に現実の社会の新しい言語傾向と合致しない面を示すことがある。

さまざまな文法のいずれにしても、一列の言語表現の組立てに関するものであって、まず基本的に単位体を定めることになる。その文法単位には、語、単語、形態素、接辞(接頭語、接尾語)、文節、句、文、文章等々がある。通常の文法研究は文章までは及ばず、文を最も大きい単位として、文内、文間の関係を論じている。文の内部で、小さい単位がどのように大きい単位を構成するか、大きい単位がどのように小さい単位で構成されるかが問題であるが、語の内部構成は、語彙論で取り扱われるのが普通である。

語には語彙論的にさまざまな種類のものがあるとともに、文法上、上の単位を構成する際の機能や形態変化の特性によって分類され

る。その分類作業を品詞分類と言い、分けられた各類を品詞という。

語と文との間にある単位として、文節とか句とかが設けられ、また、文の成分が説かれる。これらは、文の構成単位であったり、語の拡張であったりするが、それぞれ文構成上の地位や相互関係から分類される。名詞句、副詞句とか、主語、述語、修飾語とかがそれである。文の部分間の関係については、語において格が論じられる。また、語順すなわち部分間の表現序次とともに係り受け、呼応、承接、共起等の問題がある。

文は、普通の文法での最も大きい単位で、その内部構造と文表現の基本的態度(表現意図)との両面から分類される。内部構造からは、述語(陳述する部分)をもつもの(述語文)ともたないもの(独立語文)、主語述語の関係からは、単文、複文、重文等や倒置文があり、表現意図からは、平叙文、疑問文、命令文、感嘆文の伝統的な四分類その他が考えられる。

文型は、上の分類を、形式を主として総合的にとらえなおす文の表現類型で、ことに文を基本におく文法学習では、有効な整理の観点として重視される。なお、文の陳述に関係せず、文中に現れる慣用的な句法を、文型の中に含めて説くことがある。

また、語間、文間及び重文の構成において、接続の仕方が重要である。接続は論理に関係づけて考えられやすいが、主観的な性格に注意を要する。

日本語の文法的特色をごく概略に列挙するならば、まず、文の構造について、述語が文末におかれ、主語はこれに先立つというのが第一の性質である。また修飾語は常に被修飾語に先立つ。これは名詞が形容詞や助詞の「の」を受けたり、動詞が副詞を受けたり目的語や補語をとったりする場合などである。時に述語が倒置されることがあり、また主語その他の成分が省略されることが少なくない。